おわりに

一人の青年の驚くべき変化と成長を最後に記して、本書の結びとします。障害のある子どもたちにかかわる仕事をしているみなさんや、さまざまな困った行動に戸惑ったり悩んだりしているママやパパに、感覚過敏やこだわりからの卒業の歴史を伝えたいと思います。そして、コミュニケーションやことばの力も、長い時間をかけながら、力強く獲得していく姿を知ってもらうことで、子どもへのかかわりが、ゆっくり・たっぷり・じっくり取り組まれることを心から願います。

優作くんは時間をかけて発達の階段を上りました。

特別支援学校を卒業してからの出会いでしたが、そのときはとってもおもしろい絵を描く自閉症の青年でした。声に出ることばはなく、強い感覚過敏があり、食事は流動食、それもゴックンはできず、口に入れるが噛んだ後は呑み込まずに吐き出します。お母さんは少しでも食べられるようにと、工夫に工夫を重ねておられました。こだわりは天下一品、決まった道や場所はもちろん、流れる水へのこだわりが強く、トイレが並んでいる公衆トイレは、端から順番に水を流さないと気が済まないなど、時間がかかる厄介なものでした。

あるときから絵を描かなくなり、外出ができなくなり、こだわりはますます激しくなりました。一番厄介だったのは、家の中のいたるところでツバ吐きやオシッコをしてしまうことでした。被害は想像以上でしたが、有効な対策はなく、バケツで受けるなどで被害を少なくする以外はお手上げでした。環境を変えてみようと、おばあちゃんの家に引っ越したころから変化がみられました。「どこでもオシッコ」は影をひそめ、ツバ吐きも少なくなってきて、そのころから「やめて」「おでかけ」などのことばが出はじめました。何より大きな変化は、あれほど感覚過敏が強かった嚥下が改善され、普通食が食べられるようになってきたのです。それは、「○○だ」と気持ちをことばで表現する発達の宿題を、二四年間かかって乗り越えてきた姿でした。

同じころ、公衆トイレへのこだわりにも大きな変化が見られました。お母さんも何をしているのかはじめはわからなかったぐらい、ユニークな卒業の仕方でした。それは、トイレの前を通るとき、見てしまうとこだわるので、横向きで歩き、自分の手で目を隠して、見えないようにして前を通るという、こだわりを自らのやり方で克服していく姿でした。

ご両親は、悩み、揺れながらも、一番うまくいく方法が本人へのストレスを取り除くと、いつも彼の気持ちに寄り添い、つきあいながら楽しいことを見つけてこられました。二四歳になるまで、これでよいのか、これしかないと、待って、待って、育ててこられました。そして現在、しっかりとことばで「やめて」と自分の意思を伝える、自我の芽生えの段階を歩いています。どんなに障害が重くても、自分の力で育っていくことを教えてくれた優作くんでした。な

により、「待つこと」を信条とし、ねばり強くつきあってこられたご両親の努力のたまものです。

焦らない、無理しない、こだわらないは、子どもの育ちの根っこを太くするものだと実感させてもらいました。二四歳まで待てないと思う多くの親ごさんや支援者のみなさんに、知っておいていただきたい、ひとりの青年の育ちと親のかかわりです。

将来の心配や「ねばならない」に振り回されないで、いま必要な子どもの課題に向き合えば、何歳からでも、子どもの育ちをサポートすることができます。

優作くんのお母さんから、「療育って、できないことをできるようにするのではなく、ただひたすら〝能動的に待つこと〟ですよね。〝待てば海路の日和あり〟ですね。優作がもつ力を信じてやってきて良かったと、あらためて思いました」と二四年間を振り返ったことばをいただきました。

この本は、たくさんの子どもたちとママたち、療育に携わっているスタッフの力を借りて誕生しました。長い時間をかけて子どもの育ちを見守ったお母さんや、お母さんと一緒に発達の宿題に取り組んだ事業所の職員のみなさん、子どもの「困った」に戸惑いながら、療育に通うなかで子どもの育ちを実感したお母さんや子育ての葛藤を率直に書いてくれたお母さん、悩めるパパやママへの素敵なメッセージをありがとうございました。

また、ＮＰＯ法人福祉広場のスタッフも知恵を出しあいました。広い場所や遊具がなくても

子どもの楽しさを創り出せる遊びや、子どもの育ちの根っこを太くする療育をわかりやすく伝えたいと、忙しいなか、内容を検討してくれた九谷田佳代さん、横山園佳さん、廣瀬菜津実さんさん、子どもの発達やスタッフにとっての遊びの意味や役割を伝えたいと、超忙しい時間を割いて、図や文章など細かなことを考えてくれた市原真理さんに、深く感謝します。

そして、全障研職員として初めて編集を担当した小針明日香さん、サポートしてくれた中村尚子さんや圓尾博之さん、表紙やイラストを手掛けてくださった、ちばかおりさん、ありがとうございました。

この本を媒介にして、各地で療育についての意見交換や学習会が広がっていくことを願っています。そして、子どもの生きづらさや発達についての理解が広がり、何より療育に通う子どもたちが笑顔いっぱいで、「楽しかった！」、「また来たい」と思える療育が各地で広がりますように。

二〇一九年一〇月一日

池添　素